

のを見てゐる事ことでくさくした氣持きもちがのんびりと柔なげられて行く事ことが快よかつた。

しかしその途端とたん、突然とつぜん襖ふすまがあき、いつもにまして絢爛けんらんな装まひをした君香きんかが入はいつて来るが否いなや、

『貴方あなたお檢しらべよ。』

と低ひく鋭えいく云いつた。

裕佐ゆうさは一ち寸つとぎつくりとした。先刻せんこく變へんに大膽だいだんな心持こころもちちで孫四郎まごしろうの連ついでの前まへでいろくな事ことを口走くちそうつた事ことを想おもひ出したのであつた。然しかし彼かれは横よこになつた儘まま自分の前まへに生人形せいじんぎやうの如ごとく突つつ立たつてゐる女をんなを眺ながめ乍なら云いつた。『何なんだ。冗談じやうだんだらう。』

『嘘うそだと思おもふなら之これを御覽ごらんなさいよ！』と女をんなは眞劍しんけんに云いつた。『貴方あなたを探訪たんぱうねて來たのよ。』そして彼女かのぢよは奉行所おぎやうじよの役人やくじん丈だけが持つてゐる大おほきな名札なまじを見みせた。

『はゝ。驚おどろかしやがるな、犬奴いぬめ。』それを見みると裕佐ゆうさは笑わらつた。『だがどうして奴やつ、俺おれが此處こゝにゐる事ことを嗅かぎつけやがたのかな。』

『それが犬いぬだからよ。』と女をんなはやゝ安心あんしんしたらしく云いつた。『貴方あなた、此犬このいぬを知しつてゐるの？』

『いや、まだ逢あつた事ことはない。』

『貴方あなた、大變だいへんな者ものと關係くわんけいが出來できちやつたのね。これは貴方あなた、あの仲間なまかからユダと云いはれてゐる轉くるびばてれんだわ。——妾わたしを檢しらべに來たのかしら。』

『さうかも知れぬ。とに角逢かくあつてやるから此處こゝへ通とほせよ。』

『妾わたしの事ことだつたら平氣へいけいよ。あゝ屹度きつとさうよ。自樓うらの犬いぬが犬同士いぬどうし密告みつこくしたんだわ。ほつほ。面白おもしろ

い！妾わたし、からかつてやらう。』そして女をんなは起たつて行いつた。

再び襖ふすまがあき、二人ふたりの男おとこが這入はいつて來た。一人ひとりは七尺しちしゃくの鴨居からゐを頭あたまを下さげてくゞる程ほどの大男おほをとこの異ひ國人こくじんであり、一人ひとりは、すんぐりとしたその供ともの下役したやくであつた。大男おほをとこは不器用ぶきように和服わふくの羽織袴はおりはかまを穿はき、四邊あたりを壓あつする程ほどの悠揚いさやうさでギコチなくそこに坐すわると輕かろく頭かしらを下さげた。

『御遊興ごいうきようのお邪魔じやまをして濟すみません。』と下役したやくは禮れいをし乍ならいかつい調子てうしで云いつた。『此澤野このさわのさんは日本語にほんごにはもうカナリ堪能たんのうなんですが、しかし萬一まんいちの不便ふべんがあつてはと云いふんで、私わたしが幾分いくぶん通譯つうやくの意味いみでお伴ともに上あつた譯わけです。』

「先夜は宅へおいで下すつた相で失禮しました。」裕佐は赤面し乍らも落ちついて云つた。彼は自分がかう云ふ場所へ来てゐる時、それを狙つてわざ／＼冷やかしのやうに訪ねて来る此役人の心に不愉快を感じてゐた。しかしさう云ふ反抗的な氣持ちで此男に逢ふが否や、彼の氣持はぐらりと變つて、落ちついてゐる以上に此異國人に對して何となく一種の不愜さを直覺的に感じたのであつた。

實際此巨大な異國人の感じは一種異様な驚くべきものであつた。室に這入つて来る處を一瞥見た時、彼は癩病人に逢つた如くハツとして、思はず顔を背向けた程無氣味であつた。頬のこけた蒼白の顔の上部、兩の鬢と額とは大火傷の痕の如く赭黒く光つてひつ／＼れてゐる。そして眉間と、左右の米嚙みの處に焼け火箸で突いた程の穴の痕が残つてゐるのである。それが何を語るものか裕佐には忽ち覺られるのであつた。

切支丹の拷問に『囚徒』を逆吊りにして、その頭の鬚血と、胸を臟腑が壓迫する事の爲めに、口からは素より、遂には眼と鼻とから迄出血して、大抵七八時間の『早さ』で往生するのを防ぐ

爲めに、眉間と米嚙みとに小さい穴をほがしそこから鬚血をしたゝらすことになつて死を長びかす仕方のある事を彼は聞いてゐた。此ばてれんのフェレラは嘗てその拷問には堪えたのである。しかし更に一層残酷な拷問、——湯泉熱の沸騰する熱湯の中に逆吊りに浸たされた時、彼は遂に夢中で轉宗を叫んだのであつた。轉宗を一度叫んだ以上彼はもう『天國とは縁が切れた』のである。而もなほその厳しい監視と、堪え難い迫害とは續くのである。かくて彼は思ひきつて自己に對する自棄な反逆から、奉行に身を賣り、切支丹探しの犬となり、踏繪の法を案出して、奉行の歡心を得やうとした。『どうせ天國に絞いた上は地獄の鬼となれ。』彼はさう云ふ捨て鉢な氣持になつたのであつた。

「富井さんからもうお聞きになつたかも知れませんが……」

フェレラはその硫黄の灰のやうな色をした願符を逆に撫でながら横を向いてかうボツ／＼云つた。『貴方に一つお頼みしたい事がありました。』

人の顔をチロ／＼と偷み見はするが、決して眞面には見ず、人に顔を見られる事を慮したやう

な風で口縮る如く丁寧な言葉をつかふ此男の様を見ると、假令それが此男の「手」かと疑つても裕佐は苦しい程氣の毒になるのだつた。

「え、分つてゐます。聞きました。裕佐は急いで云つた。『踏給の事です。』」

「さうです。その事です。』フェレラは始めてほゝ笑みを見せて云つた。『お願ひ出来ませうか。』

その時君香が自分で茶を持つてそこへ這入つて來た。そして二人を見て、『入らつしやい。今晚は。』と、につこり微笑み乍ら云つて茶を注いだ。

『實は少し急がれてゐますんで……』と下役が口を切つた。『云ふのは、御存じの通り、踏給の檢べは毎年正月の末に行はれる事に定まつてゐるんで、なるべくならば來年のそれに間に合せたいと思ふんです。それで貴方がもし幸にそれを承諾して下さるとすると、一刻も早くお願ひしておく方がいゝと考へたんで、實はこんなお席へ迄出しゃばりたくはなかつたんですが——』

『へえ。さう？』君香は茶化したやうな調子で横から云ひ出した。『だけど、どうして此人が妾の

お客である事が貴方々にお分りになつたんですの？ 此人はまだそりやこそくの坊ちゃんで、

妾の處へなんぞ通つてる事を、どんな親友にだつて打ちあけられる人ぢやないんですのにね。』

『私達は今そこで偶然富井さんに行き逢つたのです。そして随分そこらの樓を訪ねたのです。』フェレラは云つた。

『富井さん？ あゝ、あのいやな奴。』と女は云つた。そしてフェレラの顔をじつと見入り乍らつづけた。

『異人さん。貴方、いゝお聲ね。説教でもなすつたらさぞよく通るでせうね。だけど——貴方、随分苦勞なすつたでしよ？ 一通りならぬ煩悶をなすつたわね。そして今でもまだ貴方のお顔にはちやんとさう書いてあるわ。いゝえ妾、苦勞人が好きなんです。吾氣人は嫌ひよ。』

『ふむ。さう見える筈です。此顔ですから。』とフェレラは冷やかされたと取つたらしく苦笑した。

『私怖いでせう。』

『えゝ、子供は泣くでせうね。ほゝ。だけど凡そ怖いのは反對よ。貴方、昔はさぞ立派だつた

でせうね。ほんとにどんなに立派だつたでせう。今だつて貴方が其處に坐つてゐらつしやると何だか他の人達が貧弱で、見すほらしくつて氣の毒なやうですわ。だけど、と君香は小頸をかしげた。

「貴方のお顔には何か肝心なもの——何と云つたらいいか知ら——まあ命の光り、水氣と云つたやうなものが、すつかり失せて了つたわね。その立派なお鼻から兩方の口許へかけてのいやな穢なんぞは昔はなかつたもんにちがひないわ。きつと後で出来たものだわ。さうでせう？ 妾、之でも人の心を見抜く事は名人なのよ。だけど唯一人、どうしても氣心の知れない人があるの。それは此人——彼女がかう云つて裕佐を指した。

「ふむ。裕佐は赤面し苦々しくかう云つて横を向いた。

「ふむ、ですつてさ。あの口の端を一寸引つ吊つた處を見て下さいよ。あれが此人の唯一のお得意な皮肉の表情なんですの。「ふむ」位で人をごまかさうたつてごまかされるやうな妾ぢやないわ。妾かう云ふ狡るい人は嫌い。」

さうして彼女はその眉を上げ、下眼をつかうやうにして願を出した。

「澤野さん、之から時々妾の處に来て下さらない？ おいや？ もう貴方、自由なんでしょ？」

こんな街をうろついてゐて富井さんに逢ふ位なんだから、妾あなたの淋しい氣の引けたやうな處を見ると何だか涙ぐみ相になつてよ。貴方又體が馬鹿に巨きいからなほその寂しさが眼につくんですわ。恰度不幸な人の住んでゐる家が大きくて立派であればあるほど哀れな感じが深いやうなもんだわ。貴方がいくら威張つてもすごい眼付きをして歩いたつて矢つ張り駄目よ。後ろから見ると貴方はまるで死刑囚のやうよ。どうしてとせう。貴方は貴方の今迄經て来た煩悶丈けでも尊敬される資格があるのに。だけど、妾が占ふ處によると——「彼女は顔を横にねせて下から見やうにして云つた。『貴方はきつと終りを完ふしない方だわね。貴方はきつと病氣ぢや死なない方だわ。』

「さう思ひますか——」

默然としてゐたフェレラはその蒼白な頬に異様な赭味をさし、濁つた眼に無氣味な光りを湛へ

て女を見た。

『お、美しい顔！』と女は思はず云つた。『あら、もう消えちまつた。暗い空の中にひらめく稲妻のやうだつたわ。』そして彼女は立上り乍らやゝ亂れてゐる襟をそろへた。『妾、今の貴方の顔に惚れちまつたわ。本當に。夢の中で見た事のある悪魔の顔にどこか似てゐるわ。それよりも弱々しかつたけれど。貴方本當に来て頂戴ね。妾全身の愛で夢中に可哀相がる事の出来る人に飢えてゐるんですの。私自分が愛されやうなんて氣はもう全て微塵もなくつてよ。だけど妾心から可憐相だと云ふ氣にならなくつちや本當に愛する事は出来ないんですもの。だからかう云ふ——』と裕佐を指し乍ら『溫和し相であて心底の骨の強い人には妾決して惚れる事は出来ないの。此人はこんな人の善さ相な顔してゐて心はそれは氷のやうにきついんですからね。ほ、どうもお八釜しろ。』

そして女は去つた。

『如何でせう。今の話は。』

間の抜けたやうな沈黙を破つて、下役は眼で笑ひ乍らかう云つた。

『折角ですが——多分お断りする事になるでせう。』

むつゝりしてゐた裕佐は下役の冷やかすやうな顔をぼかんと見てゐた後で思ひ出したやうにかう云つた。

『どうしてですか。』

『第一に材料が今の僕の氣持ちに全で向かないからです。それに自分の作物を人の下駄にする氣もしませんからね。』

『下駄、は、しかし鑄物でしたら、同じ物が幾つも作れるんぢやないですか。だから其中の幾個かは賸給につかはれても、他に別のを残しておけるでせう。』

『しかし幾つ作つた處でどれも自分の子である事に變りはありませんからね。それに又たとへ作り度い氣があつたにした處で、僕には餘なものを造れる自信もないのですよ。』

『何も作品としてさう非常な傑作でなくともいゝのです。只本當の信者がいくら自分をこまかさ

うと思つてもつい氣が咎めてそれを踏みにくくなる丈けの一種の神聖さ、——信者にとつての犯し難い威嚴と云つたやうなものがそこに現はれてさへおればよいので、その程度に作つて置ければ御禮は奉行から相當に差し上げられる事になつてゐるのです。」

「私達は」とフェレラが云つた。「無暗に人を疑つて許りゐる役人のやうに思はれてゐますが、そして又信者達からはさう思はれるのが當然ですが、貴方々に迄そんな疑ひの謎をかける者では決してないのです。其點は安心して下さい。」

「考へては見ませう。しかし作る氣がしないものは何とも仕方ありませんからね。」

役人達は十中の九迄諦める事になつて歸つて行つた。

10

裕佐が其夜妓樓を出たのは子の刻に近かつた。頭はヅキ／＼と痛んでほてり、體は疲れてゐた。雪もよひの間空から吹く新鮮な冷風が心地よく髪や顔に當つても枯れ果てた心の重苦しさはなほ

らなかつた。自分は一生結局之と云ふ何の仕事もせず、徒らに生の悪夢にひたつて平凡に死んで行く運命の者ではなからうか。併しその事は案外此頃の彼には簡単に諦められる事のやうな氣もしてゐたのだつた。仕事が結局何だ。事業本位で離脱と膏汗を流して生き、且つ死ぬる事が、與へられた束の間の生のうちに次から次と美しき幻を追ひ、充實してそれに酔ひながら死ぬる享樂本位の生活よりも果してどれだけ人生本來の意義に叶つた事か、それが第一疑問である。事業、それも畢竟或る享樂を目的とするものにすぎぬとすれば、直接その結局の目的の爲に生きる事が現世に於て輕蔑され、手段たる事業の爲めに生きる事が尊敬されやうと、それが死と云ふ絶對者の前にどれだけの根本的差別をなすものであらう。畢竟只「自分の氣のまぎらし方の區別」に過ぎないか。そんな氣が近頃の彼には屢々眞面目に起るのであつた。「か」と云つてその自分の享樂の爲めに他人が眼に見えて不幸になり、多くの運命が狂はせられる事が事實に於て自己の享樂の障りとなり、苦となるとするならば、自己の享樂が他人の享樂と一致する處に生ずる更に深い調和的な享樂の慾を満たす法は何であるか？」彼はさう考へて、「それはね、貴方が矢つ張

り識らず／＼神を信じてゐるからの事ですよ。」と云つた吉三郎の言葉を思ひ出した。そして自分にとつて享樂が享樂となつてゐたのは君香が自分を眞に愛してゐると思つてゐたからの事で、それは又自分が矢張り何かの事業によつて自己を不滅化する處に得られる幸福の意識を欲してゐるから、その事業が自分に覺束ない事を思ふが故に、その空虚をまぎらさうとして無理にあんな空な享樂主義を肯定しなかつたかの事だと思つた。「もしあの女が……俺が全心をこめて愛してゐる心算のあの女が」と彼は更に考へた。「一緒に死なう」と俺に促したら、「よし死なう」と其時俺は云ふであらうが、いざとなつたら矢張り決して死にはしないだらう。そしてあの女の死んで行く様を案外冷然と見てゐるかも知れない。あの女が毎も俺に「實がない。狡るい。」と云つたり、「此人はこんな人の善さ相な溫和しい顔してゐて、心はそれは氷のやうにきついんですからね。」と云つたりしたのは皆本當だ。しかしさう思ふと彼は自分が厭になると共に可哀相になり、腹が立つて來た。

『あいつだつて……』と彼は思つた。「俺が思つてゐたやうな女ではない。せめてそれだけが俺の

意識の上での生活の望みでもあり慰安でもあるあの女の誠は畢竟「遊び女の誠」にすぎなくて、それを身うけが出来る杯と夢みてゐた俺は矢張りお芽出度い坊つちやんに過ぎなかつたのだらうか。』

君香が始め悪く云つてゐたフェレラを一眼見るが否や急に態度が變り、哀憐の情を起したらしい其心理は彼には合點も行き、氣持ちよくも思へたのであつた。しかも君香が冗談のやうに皮肉のやうに饒舌つた言葉の中には、とても只笑つては聞き流せない實感らしいものが多くあつた事を彼は疑へなかつた。彼女の云つた事がどこ迄が眞實で、どこまでが嘘なのか、彼にはさつぱり見當がつかなかつた。フェレラは彼女の昔の情人にでも似てゐて、それを「夢に見た事のある悪魔」などごまかしたのではなからうか。それは自分の好きなものを怨と譏り、内心嫌ひなものを故らに褒める遊び女らしい一つの技巧に過ぎなかつたであらうか。或は唯單に嘲弄であつたのであらうか。

『疑つてもゐないくせに疑つたやうな顔して實のある處を見せやうつたつて其手は喰はなくつて

よ。」と彼女は後で云つた。「嘘つき、あれつぼちの事で苦しめる柄でもないのに。」とも云つた。「無論よ、妾、貴方を思ふ存分苦しめて上げ度いわ。貴方はもつと苦しませられる必要があるのよ。だけど妾は甘いからそれが出来ないのよ。あゝ妾貴方を本當に苦しめてやり度い。それは貴方を愛するからよ。貴方の爲めを思ふからよ！」彼女は又こんな事を云つた。

彼はそれらのことを想ひ出して、泣き乍ら笑ひ喚き度いやうな気がした。「あゝもしあいつ迄が俺を見捨てたら、あいつの愛がまつたく信じられなくなつたら……！」

ふと彼は吉三郎の明るい顔を思ひ出した。そして「あいつは幸福だな」と呟いた。

「オイ、自暴に寒いと思つたら其筈だ。雪だぜ。」と一人の鍬の様なものを擔いだ男が云つた。「此土地に藏暮の中に雪が降るなんて、陽氣の奴、氣が違ひやがつたな。」

「本當に俺ア霜だとばかり思つたに。」と、もう一人の男が云つた。「なにちき上つちまわあな、一寸たア積るめえよ。」

「なるほど雪だ。」トボ／＼と暗い坂道を上つてゐた裕佐は始めて氣がついたやうにかう呟いて、

墨のやうな重い空を見上げた。チラ／＼と大な雪の片々が顔や肩にふりかゝるのが彼には快かつた。

「お前、金鎧を持つて来たか。」又一方の男が訊いた。

「そんなもの持つて来るもんかな、馬鹿臭え。」ともう一人が答へた。

「だがまア、行く丈けは行くだ。行つて見て誰も来てなかつたら歸るのよ。掘つて見ましたが何矢つ張り犬の死骸でしたつて云やア濟むんだからな。」

「本當に悪い悪戯をしやがるな。十字架をおつ樹つといて猫の死骸をほじくらせやがる。それつてえも役人共が死んじまつた者の棺桶をほじくり返へして迄檢べるやうなしつゝこいマネをしやがるからだ。」

「何も死んだ者を檢べる譯ぢやねえ。それで後に生き残つてる自家の者を檢べるんさ。だけど又片つ方も片つ方だ。死骸の頭へ頭陀袋位掛けられたからつて御苦勞さんに土ん中の棺桶の蓋をひつべがして迄外さなくつたつてよさ相なもんぢやねえか。頭陀袋一つで亡者が浮ばれねえつて

譯でもあるめえに。」

「兩方が意地の張りつくらをしてけつかるんだ。お蔭でこちらとら迄こんな雪ふりの夜更けにこき使はせやがつて、だが来たからにや只ちや歸らねえつて。」

こんな事を彼等はブツ／＼云ひ乍らや／＼千鳥足で裕佐の前を歩いて行つた。

裕佐は自家へ歸る氣はなくなつてゐた。彼は今何よりも眠りを求めてゐた。一切を忘却の川に流し捨て、翌朝の日光と共に自己を生れ變つた如く新鮮な、生き／＼した者にして呉れる眠りの「救ひ」を求めてゐた。それが得られ相に思へるならすぐにも彼は飛んで歸り度かつた。しかし歸つた處でその救ひは到底得られ相もないのみか、只果てしない覺醒の間になほも身を任し續けるよりない事は眼に見えてゐた。其時二人の勞働者の會話が計らずも彼の好奇心と、望みとを轟と捕へたのであつた。

「よし、あいつ等に跟いて行つて見やう。」

そして彼は何かを豫感する如く、彼等の後に黙然と従つた。

「オイ、道を間違へやしねえか。墓地はこつちじやねえぜ。」

「薄野呂奴。もうあそこに墓が見えてるぢやねえか。袈裟を着た坊主が隠がんでるやうな格恰をしてよ。」

「なるほど、近道をしたんだな。——ヤ、人がゐるぞ。何か白いものが動いてゐるぢやねえか。」

「ぼけちやいけねえぜ。オイ、手前先刻の酒ですつかりぼけちまひやがつたな。あれや杉の木に雪がつもつたのが風で捲れるんじやねえか。」

「さうじやねえよ。や、提灯かな。はゝ。なるほどあそこに新しい塚があらア。あれだな、うめえうめえ。」

「何だ、手前掘るつもりなんか。」

「わけはねえや。どうせ泥をおつかけてあるばかりなんだからな。それに棺桶だつて直ぐ蓋を開けられるやうに釘を外へ打ち抜いてあるんだからひつべがすなア造作はねえや。」

「ふむ。それや自家の者が頭陀袋を取り外す爲めのことだ。もう今頃行つたつてちやんと本式に

釘づけにしちまつてあらアな。見ろ。梟めがホウ／＼と笑つてけつから。」

『釘づけだらうが粕づけだらうが構ふ事アねえて。そいつをぶつこはしや、銀の十字架かメダイか取れやうつてもんだ。さうすれやそいつを潰ぶして錢にした上に褒美の酒手が貰へるつて譯だ。』

併し裕佐は自分の後ろに、半丁ほど離れて、二人の婦人らしい人影が跟いて来るのを見た。彼は一寸立ちどまり、そして彼等がその墓地へ、その新塚へ、行く者であるかどうかを見届けやうとした。併し二人の婦人はその墓地の手前で立ち止まり、何かを私語くらしく左手の道を指し、そして非常な早足で其方へ曲つて行つた。

『きつと降誕祭へ行く連中かも知れない。』と裕佐は思つた。『だが何んであんなに急ぐんだ。まだそんな時刻でもないに。』と、又二人の去つた後を丁度又半丁程の距離で、更らに二個の黒い影が忍びやかに跟けて来るのを彼は見た。闇眼でよくは判らないがその一方は非常に背高く、そして二人は黒いマントのやうなものを頭から被り、一言も口を利かず少時立止つてじつと此方を

見てゐる様子であつたが、又二人の婦人の跡をつけて左手へ曲つて行つた。

『何だらう。』裕佐はやゝ不安な氣に襲はれて訝かり始めた。『事によつたら、あの一人はフェセラではなからうか。もしさうとすれば……』と彼は考へた。『彼等はもう今夜降誕祭のある事に感づいてそれを探りに行くのではなからうか。』

さう思ふと彼は一種不安の緊張の爲めに身を顛はした。『よし。あいつらの後を俺が又跟けて行つてやらう。』そして其方へ向つて彼は大股に歩き出した。

『降誕祭へは俺は行くまい。』と彼は又獨り言つた。『あの人に逢ふ事は恐ろしい。そして此續れた體の俺が行く事はその神聖な祭りの清淨をけがすものだ。俺は只窓から中を盗み見てやらう。只一眼——そして俺は外で見張りをしてやるんだ。』

彼は急いで後へ引返し、曲り角を左へ折れると、坂の頂上にちらりと明りが見えた。その灯の赤さによつて、『焚き火をしてゐるな。』と彼は思つた。『あり難い。そしてあの茶屋へ行つたら多分様子が知れるだらう。』

彼がその茶屋であり又一膳飯屋でもある家に這入つて行くと、二人の男は後ろ向きに土間の壁縁に腰をかけて焚き火にあたつてゐた。

「ぢや卵酒でもつけますか。温まりまするで。」

五十前後の齒を黒く染めた主婦は這入つて來た裕佐に莞爾とお辭儀をし乍ら「お寒う。おあたり。」と云つた後で、又二人にかう訊いた。

「いや、肉類も卵も禁止だ。今は一寸、精進物の他はやつてならん折なんぞな。」一人の男は頭から足の先迄ギョロリと裕佐を見た後でかう云つた。「只熱燗に漬物でも添へてもらへれや結構だ。」

「此犬共奴。」と裕佐は思つた。「降誕祭と悲しみの節とを間違へて下手な化け方をしてやがるな。」彼はかう心に苦笑し乍ら態こそそのマントのやうな物を着た大男の前に廻つて「御免」と云ひ乍ら煙草に火をつけた。大男は頭巾を眼深にかぶり、黒い毛織の襟巻きを鼻の頭が隠れる迄ぐるぐると顔に捲きつけて俯向きながら、その恐ろしく大きな瘦せた兩手を火にかざしてゐたが、ゆつと

り顔を擡げるとハツとしたやうに、

「や、萩原さん、先刻は失禮。變な處で逢ひましたね。」かう云つて底光りのする眼で愛想よく彼に會釋した。

「どうも貴方らしいと思つたんです。」裕佐もハツとし乍ら云つた。「今頃こんな處にお務めですか。」

「御苦勞さんです。一寸用がありません。」フェレラはその連れを顧みて苦笑しながら云つた。

「で貴方は？ 何か墓地に用事でもおありになつたんですか。此夜更けに。」

「あんまり氣違ひじみた世話やきを見るとつい此方迄物好きな氣持ちになるもんで。」裕佐は一寸黙つた後でかう云つた。「何しろ死んだ者の體の検査迄しないと氣が済まない世話やきが居るんですからね。」そして彼は二人の「おかしな男」に逢つた事と、その二人が何をするか見やうと思つて跡をつけて見た事を有禮に話した後で附け足した。「それに僕は雪の中を歩く事が好きなんです。此土地では珍らしいから。」

『さう。雪の夜は美しいもんです。』フェレラは云つた。『しかし貴方は今夜もつと美しいものを見られるでせう。——それは多分先刻お願いした貴方の仕事にいゝ材料になるでせう。』

『何です。それは。』

『降誕祭です。ゼズスの誕生を信者達が祝ふ祭りです。それは美しいもんです。』

『さうでせうね。そして貴方々はそれを捕縛しに来てゐるんですね。』

『ふむ。ところが奴等だつて中々さう容易く捕まるやうな間抜けはしませんよ。もう心得てゐますからね。』と連れの與力が云つた。『第一今夜はその祭りの當夜ではないんです。御存じの通り。』

だから奴等は用心深く先き廻りをしてこんな晩にやるんです。こつそりと。それもとどこでやるんだか全で分りません。』

『なる程、それで貴方々は此處の内儀さんから場所を嗅ぎ出さうと思つて、あの仲間らしく思はせやうとしたんですね。——だがさう云へば今貴方々の前を二人の婦人が歩いて行きましたね。』

『え、茂本の方へ。』と又與力が云つた。『よくやる手ですが、私達が跡を跟けてると思ふんで、』

足跡をくらすつもりで態と大浦の方へ曲つたやうな風でした。ヘツヘ。』

『だが大抵分つてはゐます。』とフェレラは云つた。『どうせすぐ近所に祈禱が洩れ聞こえるやうな人里の中で彼等は集まりはしませんからね。いつも大抵茂本のはづれにゐる醬油屋の庫を彼等は密會所にしてゐます。行つて御覧なさい。もうそろ／＼始めてゐる時分です。』

『私達は今夜は捕縛なんぞはしませんよ。御覧の通りの仕度ですからね。只一寸様子を見るだけです。何しろ向ふは多勢ですから。』と與力が口をそへた。『え、道ですか？ 茂木の入口の處で右に細い田圃道がありますかね。何でも人通りの少い筈の處に足跡が多かつたらそこを行きやいんです。ヘツヘ。時ならぬものが降つてくれたお蔭で足跡を見つけるにや丁度いゝ都合でさ。』

そして二人は顔を見合せてにやりと笑つた。

『茂木までは少し大變だな。それに風も出て来た。』裕佐は呟くやうにかう云つて一寸外を覗いたが、主婦の處へ行つて茶代を拂ふ振をし乍らそつとその手に銀貨を握らせた。そして今夜此近くに切支丹の集まりがあるの知らないかと低く嚴かに訊ねた。主婦は眼を圓くし、銀貨と彼の顔

を見比べてゐたが實際何も知らない様子であつた。
裕佐は外へ出た。

一一一

雪はもう止んでゐた。そしてサラ／＼と溶雪をふり落とす松の梢の上に高く、二三の星が深淵の底に光る金剛石のやうに寒くまた／＼いてゐた。
彼は急ぐと云ふより寧ろ走つてゐた。そして發作的に何遍も後ろを振り返つた。彼等が自分の跡を跟けて来ないと云ふ事は彼には一層無氣味な事であつた。彼等はいやに餘裕綽々としてゐる。そして凡てを見抜いてゐるらしい。信徒の集會所は茂木であると彼等は云つてゐるが果して本當にさう思つてゐるのであらうか。併しもし今夜の集會所を彼等が知つてゐるとするならば、彼等は何であんなに空とぼけて迄それを探らうとするのであらう。さう思ふと『矢張り知つてはゐないのだ。』と彼は安心もした。しかし何故自分に、此何者であるか分らぬ自分に、彼等は輕々

しくその秘密な知識を打ちあけるのであらう？ 彼は自分の去つた後で彼等がカラ／＼と笑つてゐるのを眼に見るやうな氣がした。『何でもいゝ。早く知らせなくてはならない。』
彼がさう思つて目あての家の方へ道を曲らうとした時道端の納屋の後ろから突然ぬつと一人の男が現はれた。

『待つてゐました。萩原さん』と其男は青年らしい聲で云つた。『貴方が此道を通られはしないかと思つて来てゐたんです。此處を通つてはいけません。雪に足跡がつかますから。』

『だがぐ／＼してはゐられませんよ。もうその茶屋には與力が来てゐるんですから。』
『もう？』吉三郎は流石に驚いたやうに云つた。『しかし大丈夫です。奴等はあの場所を知つてゐる筈はあゝません。さア此處を飛ぶんです。よござんすか。』

そして彼は三尺程の溝を飛び越え、熊笹の茂つてゐる一間餘りの崖を攀ち登ると上から手を差し延べた。裕佐がその後を續いた時、その叢の中からは鐵鷲がチ、キ、と啼いて飛び散つた。崖の上は桑畑であつた。

『えらい處へ案内して済みませんでしたね。』青年は元氣よく太息を吐き乍ら笑つた。『だが本當によく来て下さいましたね。其代り今夜のは本當に今迄にない立派な降誕祭です。』

『長老は来られましたか。』

『え、實はもう七日程前から私の處におかくまいしてあつたんです。私は是非貴方に一度あの長老を見せたかつたんです。』

『しかしよく天草から無事に渡つてくる事が出来ましたね。』

『熱心な信者の船頭がうまく隠してお連れして来たんです。何しろもう七十近い齡で八年の間あの天草の全で無人島同様な所に乞食のやうな生活をして、僅かな信者を作り乍らかくれてをられたのですからね。しかしその豊饒とした氣力と、つやくしい顔の輝きとの少しも變らないのは全く驚きますよ。』

風と闇とに抵抗して二人は道らしい道へ出てゐた。そこは峰の絶頂で眼の下に底知れぬ闇の如く黒く展がつてゐる千々岩灘が一眼に見え、左手には宛ら生ける巨獸の頭の如く老大に見える島

原の温泉獄 蜿々と突出てゐる。ごう／＼と哮つて彼等に吹きあたる風の音は、その既に幾十の人命を呑み食つてなほ飽き足らぬ巨獸の吼える如く思はれた。と、又遙かに——縹渺の彼方には海上としては高過ぎ、天空としては星の光りとも見えぬ、海とも空ともつかぬあたりに天草のいざり火が吹きすさぶ 風 に明滅する如く微かにまたゝいてゐるのであつた。

『御覽なさい。こゝへ来るともうこんなに澤山の足跡が見えるでせう。あそこに箒のやうに風で曲つてゐる森が見えますね。』と吉三郎はグツと襟を押えて掻き合はせ乍ら云つた。『あの森の下にその家はあるんです。どうです。全で見えないでせう。晝間なら家根は見えるんですが。』

『しかし萬一発見された場合には、逃げ道はあるんですか。』

『え、無論です。しかしどうせ私が外で見張り番をしてゐますから、踏み込まれるやうな心配はありませんよ。』

まつたく其の家はすぐ側まで行つてもそれと知らずには一寸氣がつかない程、闇の中にあつて闇にとけ込んで見える不思議な一軒家であつた。

『さあ、裏から廻りませう。さうすれば此真つ暗に見える『天の岩戸』の中にどれ程の光りが溢えられてあるか、貴方は喫驚なさるでせう。』

併し其『岩戸』の中の光景は『裏から廻はつて』這入つて見ずともその一分の光りも洩れぬ壁に耳をあてればカナリ充分に想像は出来るのであつた。その厚い壁を通してそこからは裕佐が嘗て夢想にも聞く事の出来なかつた世にも美しい合唱が洩れ聞こえて来るのだつた。

『あはれみの御母天つ御みくらに輝ききらめける皇妃にて在す。』

御身に御禮をなし奉る。

流人となるエワの子供ら

御身に叫びをなし奉る

此涙の谷にてうめき泣きて御身に願をかけ奉る——』

『聞こえますか。あれはサルベンジナと云つて、『まりあ』に憐れみを乞ふお隣りの歌です。今夜は殆んど一晩中祈り歌ひ明かすので、降誕の祝ひの歌の他にあといふのも歌ふんです。』

歌はなほつゞいた。

『あはれみのお眼を我等に垂れ玉へ』

慈しき御手の御執り成しによりて此の惱みのさすらひの後

御胎内の尊きにて在すひりをの若君を我等に見はし玉へ

深く御柔軟、深く御哀憐すぐれて在す

びるせん、さんた、まるやの御母

おうら／＼のびす。おうら／＼のびす。』

『此處が遣入り口です。牛小屋ですがね。吉三郎はかう云ひ乍ら納屋のやうに見える裏口の戸を開けた。御覧なさい。貴方始めてですか。之も毎年やる儀式なんです。』

爐にあか／＼と焚かれた火の餘燼が綺麗に掃き清められた小屋の中をほんのりと温く照らした。一隅には一匹の黒白の斑の牛が新しい藁をタツブリと敷いて静かに口を動かして乍ら心地よげに臥してゐた。牛の前には赤飯が盛つた盆が供へられ、そのわきになみ／＼と『産ぶ湯』の水

をたゝえた飼桶が置いてあり、その水に灯かけが緒く映つてゐた。勿論、火が焚いてあるのは、『御子』が凍えぬやうにとの意味である。

吉三郎は指でコツ／＼と合圖をするやうに扉を叩いた。と、ぱつと扉が開き、あふる／＼許りの光り——裕佐にはさう感じられた——が瀧のやうにそこから迸り出るのであつた。

「吉三郎さん？——お一人？」

扉口に立つた女はかう張りのある聲をかけて扉に片手を寄せながら、胸にかけた小さい金の十字架がぶらりと前に垂れる程頭をかよめて薄暗い小屋の中の方をのぞくやうに見た。

「いや。一緒。丁度うまくお會ひ出来たんでね！」吉三郎は元氣よく云つて、眩し相に眼をしぼだたき乍ら呆然と傍に突つ立つてゐる裕佐の方を顧みた。

「あら。さう。——」女は一步退いて一寸眼を伏せた。「妾、随分、心配してゐたのよ。」

「だらうと思つてゐました。さあ、萩原さん。上つて下さい。」

「いゝんですか。」裕佐は畏れるやうにモジ／＼と口籠つた。「僕は上るつもりではなかつたんです

が。」

「いゝどころではありませんよ。無論。」

吉三郎はかう云つて自ら上り乍ら、此『よくやつて来た珍客』に何か歡迎のお愛想を云はないかと促すやうに姉を見た。

「本當にようこそ。——随分大變で御座いましたでせう？　こんな山の中で。——」

むしろ努めた感じで之丈けの事を云つたモニカの調子は、最早心に思ふ半分も云ひ現はし得ぬ、羞ぢらしい深い娘の口調ではなかつた。ましてそこにチャーミングな餘情を含みませんが爲めの態とらしいあまい「舌足らずさ」ではない。かと云つて、それは又善良な教養のある人妻にのみ見られる一種の世故慣れた母らしい落ちつきのある聲でもない。決して無愛想な調子ではないが、氣の利いた世俗的な感じでは更でない。冷たいと云ふにしては奥底に「心」がありすぎる。しかし只温かく、柔和なと云ふのともちがふ。それでゐて角立たしい氣持があるのであれば微塵もない。

「随分暫くでございましたね。」

むしろ弟の方に體を向けながら彼女は又かう云つて裕佐の前に高島田に結つた頭を下げ、軽く手を突いた。そして『暫く。』と吃るやうに漸く云つてあわて、其處に坐わり、べこんと頭を下けた裕佐の緒くのぼせた顔をちらりと見ると、かすかに苦し氣な微笑をたゞ乍ら又弟に顔を向けた。が、其時彼女の頬にひらめく如くさした趣味は、四尺とは離れてゐなかつた弟の眼にもとまらないらしかつた。

彼女が島田に結つてゐる處を見るとまだ人妻でない事はすぐ知れる事であつたが、その標榜と、年輩とを以て未だに獨身でゐるのはなぜかと云ふ怪訝も同時に誰にも起る筈である。一度ならず二度迄も信者からの縁談を彼女の女が斷つた眞の理由を知つてゐるものは唯弟の吉三郎のみであつた。

『あの姉はね、母になる事を怖れてゐるんですよ。自分の運命が『壘の上で』息を引取る者とは違ふ事を何となく迷信的に自覺してゐるのですよ。僕はさう思つてゐます。』と吉三郎は昔て裕佐にかう云つた事があつた。

『あゝ、さう。』起ちかけた彼女は又何か弟にさゝやかかれて無難作に低く云つた。『あの詰らない花を貴方、買つて下さいましたのですつてね。お蔭様でこれ丈けでも飾りが出来ましたんですのよ。』

外見は廢家のやうに見えるその五十疊許りの家の中央には枝葉を繁らせた大きな松と竹とが樹てられ、その枝にさした幾十の紅白の蠟燭があか〜と燈つてゐた。そこに又『アーメン』ゼウスべてろ何某』同く、よはんな、何某』などと認められた五色の紙切れと、造花の白百合とが無數に結び垂れ下げられてあつた。正面には高く兩つの燭臺の間に聖像がかけられ、そのわきの壇上にはばてれんらしい黒衣の老人が腰をかけて一人の男と何か熱心に話してゐた。そしてその前には白襟に黒の禮服を着た多くの女達と、男とが並んで、頭をたれながらその話に耳を傾けてゐた。

『あちらに行らつしやいませんか。およろしかつたら。今長老様のお話が始まつてゐる處ですの。』モニカはかう二人にさゝやくと、軽く一禮してそつちへ去つた。

『まあ自由にして、下さい。努めないで。』と吉三郎は云つた。『僕は又見張りに行つてゐなければなりませんから。』

『いや、今度のはわしが行つてゐますじや。』と一人の百姓らしい男が、傍から立ち上つて遮切つた。『貴方許りに行かせちや相濟まない。』

『でも貴方は年寄りだから。——それに風が強いのですよ。』

『なあに、風位。かう見えたつてわしやまだくあんた杯よりは頑丈ですて。へッへ。』

年寄りはまだ下駄を突っかけてゐた。吉三郎がなほ危ぶむで『大丈夫ですか。本當に。』と訊いた。『それにはもう外へ出てゐた。』

『さうだ。私は貴方のその間を待つてゐたのだ。それは大事な問題です。』と長老の聲は響いた。

『だか吾々は靈に於て神の國に生きる事が出来ると同時に肉體に於てカイザルの國に屬してゐるのですから。今の現世に於て、吾々は何と云つてもカイザルの支配を受けない譯に行かないのです。が、吾々が捷利——即ち救ひを得る道は、徒らにその事實にあらがふ事ではなく、苟も自分

の靈が害はれ、縛られ、殺されるのでない限りは、此運命を諦め、出来るならばそれに超越してカイザルのものはカイザルに返し、忍べる處迄は彼等の要求に譲り、ゆるして、只靈に於て益々神の國と其美しさを求める事である。吾々はそれでいゝのであつて、又どうせ自由なものも靈だけなのですから。吾々は肉體に於ていかに束縛され、迫害を受けるとも、もし靈に於て美しく生きるならば、常に神の愛を感じて喜び、自由である事が出来るのですから。』

『しかし奴等の無法と云つたら——』一人の男は膝を乗り出した。『もうお話にも何もならねえチヨツカイ好きの悪魔でムいますでな。』

『たしかに悪魔の暴力は今殊にはけしい。神の國とその美しきを求める事が強ければ強い丈け吾は苦しませられるのです。』長老は少し顔を曇らせた。『しかし悪魔は決して最後のものではない。

必ずその後にはまだ何かある。吾々はその悪魔の後にもるものに試験を受けてゐるのです。しかし——』長老は一段聲を強くして云つた。『吾々は基督が十字架につかれた事を彌が上にも生かさなくてはならない。吾々の使命が皆基督と共に十字架につけられる處にあるとするならば、基督が

あれほど進んで自ら十字架の苦難につかれた意味はどこにあらう。それは却つてその重大な意義を消す事になる。殉教者は尊まれなくてはならない。が、云ふ迄もなく殉教のみが尊まれてはならない、吾々はカイザルの支配下に生きながら、而も身を殉ぜずに立派に美しく生きた多くの聖者のある事を知らなくてはいけない。吾々の幾多の先輩は既に美しき者の強さを遺憾なく發揮し盡したのです、吾々は今美しき者の賢さを示さなくてはならない。『蛇の如く惻しくあれ』と云ふ事は素より放縦な狡猾をさして云ふのではない。併し深く身を愛する事は靈を大切に守る事である。その靈と肉とは只自分の物ではなく、神のもので又隣人のものである。もし基督の教へが父なる神を眞心をこめて愛し、その美しきを求め、又隣人を愛することであると同時に、又その神によつて與へられた身の生を神ならぬものゝ爲めに空しく抛げ捨てるやうな愚かな不敬な事をせず、それを深し愛し尊重して自然に生きる處に自づと神の恵みを受けて無信徒の知らぬ樂しみを樂しむ事にあるのでないとするならば、基督は十字架にはつかなかつたのでありませう。』

『しかし乍ら皆さん。』長老は語をついだ。『私達の尊い先輩が造り、今又此わたし達が現に造りつ

つある日本での切支丹の事蹟は決して單に日本一國の史上に於てのみの異彩のある光りではありません。永久に神の國とその美しきを求める凡ての熱烈な眞心の鑑となるでせう。日本人はその美しい眞心を強く持つ上に於て他のいかなる國民にも決して劣らぬ者である事を吾々切支丹によつて程強く示したことは嘗てないのです。此事實は永久に日本國民の深い力となり、希望となるでせう。わたしは遙々遠い國から此心を求めて、此心にふれ度くて貴方々の處に來た。基督といふ大なる星の導きと、その光りの暗示とによつて、遙かに離れてゐる二つの小さい星がまたよき合ふやうに、私と云ふ一つの心が、貴方々と云ふ心を探ねて、はるかに暗い長い海上を、荒い波や風と戦つて此處迄來り來た。そこには暗礁があり、そして岸に着いてゐる私を岡へ上げなかつた。私達はお互に岸の上と岩の上とから呼び合つた。叫び合つた。八年の間、而も遂に貴方々の眞心が一つの強大な引力に結晶して私を其暗礁から引ずり上げ、此處へ連れて來たのです。私の心は今貴方々の百合のやうにやさしい清らかな愛と、燃えるが如き眞心とのさ中に抱かれ、ひたつて、今死んでも悔む處もない程の法悦に酔つてゐます。私の期待はそむかれなかつた。あゝ

此地上に於て此の如き深い喜びが神から恵まれるのでなしにどこにあり得ませう！ あゝ眞心ほど美しく、その力ほど強いものはないのだ。併しもしそれが眞理の巖の上に立ち、その光りによつて輝くのでないならばそれは決して此世を導いて行く力とはなり得ないのです。吾々は基督によつて示された眞理と、神との名に於てなほ益々團結を固くしなければなりません。それは此くらき世に光りを燈し、それを守らんが爲である。あゝ我等をしてなほ強く此聖なる團結を増さしむる神への愛を彌まし玉へ。アーメン。

長老がかう云ひ終るか否や群がる男女達は各々のその胸に十字架をかき、長老の傍に集まり跪づいてその衣の襲に接吻した。

『アーメン・ゼズス！ アーメン・ゼズス！』

しかし彼等が口々にかう呟いた丁度其時であつた。長老の眞後ろにあつた『非常口』の扉が突然カタリと音がして一寸程開いた。サツと其處から風が吹き込んで聖像の兩側にある燈を消した。忽然として我れを忘れた歡喜と此世ならぬ陶醉との絶頂にあつた一同の顔は一齊に化石し

た如く蒼く硬はり、そして彼等は、ハツと一時に息をひそめて、睜開いた視線を其方に向けた。そこには眞暗闇の中に燭火の反射によつて二つの眼が光つてゐるのが見えた。一同は棒のやうに立ち上つた。

『靜かに！』と長老は制した。『あわてゝはいけない。私にお任せなさい。』
そして彼は靜かに後ろに振り向いた。

一一一

吉三郎は長老の身を守らうとして逸早くそのわきに來て立つてゐた。併し彼がその『二つの眼』と長老との間に立ち塞がったやうに吉三郎とその二つの眼との間に裕佐は割り込んだ。

『君達は黙つてゐらつしやい。』と裕佐は低く鋭く吉三郎に云つた。『そして誰も掴まる必要はない。早く、あつちから！』と裏口をさした。そして彼はその扉口をガラリと開けた。

『はあ！ 貴方は矢つ張り『見に來て』ゐましたね。』

その闇の中の男は云つた。

『さあ外で話をしやう！ 外で！』裕佐は自分で外へ出乍ら云つた。『犬は人間の座敷に立ち入る資格はない！』

そして彼は扉を閉めやうとした。併し扉は何かを間にはさまれたやうに動かなかつた。二つの眼は蛇の眼のやうに動かさず、じつと長老を見つめてゐたが。

『おゝ。アントニオ・ルビノー。ルビノー！』

と低くふるふるやうに叫んだ。その聲を聞くと長老はやゝ愕然としたらしく反響するやうに重く應へた。

『おゝ汝はキリシトフア・フェレラー。フェレラー！』

『フェレラー』と云ふ語を聞くと家の中の一同は又湧き立つ様にざわめいた。『ユダー。ユダー』と云ふ聲が聞こえた。そして二二の侍は隠し持つてゐた刀を執つた。

その時、呼び笛の聲が高く響き、もう一人の男が闇から現はれて、その闇に足をかけた。裕佐

は繩を持つてゐるその右の手頸を掴んだ。

『何だ貴様は！』その男は抑えられた手を強く振り乍らわめいた。『仲間か！』

『さうだ。俺は此仲間の頭だ！ 掴まへるなら俺を掴まへろ！』

『おゝ長老様！ 早く〜お逃れになつて！』

モニカはかう叫んで、長老の膝にすがりついた。

『わたしはいゝ。海神はわたしが所望の寶なんだ。わたしを投げれば海は鎮まる。』

長老は自若として嚴かに云つた。しかしモニカは聞かなかつた。

『いゝえ、役人は貴方様のゐらつしやる事を知つてはゐなかつたのです。どうして貴方様をこゝに残して妾達は逃れられませう！』

『わたしの云ふことを聞きなさい！』長老はやゝ激した如く顔を赭くして命令するやうに云ひ放つた。『わたしはもう既に身を隠しすぎたのだ。時を待ちすぎたのだ。しかしそれは何の爲めだ。貴方々眞に生きねばならぬ人達を守らんが爲めではなかつたか！ さあ、早く！』

そして彼は鋭く裏の戸口を指すと、又後ろに向いて捕手の方に一步近づいた。

『さあ、わたしを捕へなさい。昔の親友よ！ 大なる神は屹度君の罪をも宥し玉ふだらう。』

長老は殿かにかう云ひ乍ら、自分の裏に一同をかばう如くその大きな両手を擴げた。そして一瞬フエレラの眼を屹と視ると眼を閉じた。

フエレラは水のやうに眞蒼になり、無言のまゝ靜かに繩を取り出した。しかし彼が闕の上に立ち上るや否や、彼はフラ／＼としてよろめき、そしてもう一人の男の足許に倒れた。

一三

半時間程を経て後、裕佐は一人道もない峠の上を歩いてゐた。いばらや萱の爲めに傷ついた足や手から血を流してゐる事も知らぬらしく夢中によろ／＼と歩いてゐる彼の姿は宛ら夢遊病者のやうであつた。そしてとある草原へ來た時彼はそこが雪で濡れてゐる事も考へず、自づと倒れるやうにそこに身を轉ばした。

何と云ふ一夜であつたのであらう。ガン／＼と鳴り響く混沌たる彼の頭の中には最前からの一切の光景、人物の顔——のやうな墓場の景から茶屋の中でのフエレラとの異様な邂逅、青年の顔、晝の花園の如き光りと色とにあふれた祭りの光景とその歌、モニカの顔、長老の顔、そして最後の突然蛇のやうな眼を持つた探偵者の襲撃が一座の有頂天を破つた時『おゝ、長老様、早く／＼お逃れになつて！』と叫んで、その膝許に身を投げた時のモニカと、それに對して儼然と答へた時の長老の姿、フエレラの昏倒。

それらが一時に彼の頭の中にグル／＼と渦の如くとめ度なく廻轉し、そしてその一つ／＼の印象がくつゝいたり、離れたりした。凡てが全く夢としか思はれなかつた。

『さうだ。俺は此仲間の頭だ！ 捕まへるなら俺を掴まへろ！』俺はあんな事を云つたのだ。——ふとかう思つて彼はゾツと身を顛はせた。併し『俺には矢つ張り勇氣があるんだな。眞心から出る勇氣が、』と思ふ子供らしい意識が彼の顔に満足氣な微笑を浮べさしてゐた。

實際彼は指揮官フエレラの實に思ひがけない昏倒の爲めに、捕縛が『その場丈けとしては』と

も角不成功に畢つた事を思ふと、もうその後を『どうなつたか』と追窮して考へる氣にはなれなかつた程満足な自意識に酔つてゐた。そして自意識がそのやうに満足した時にのみ人の心に湧然と起つて来る一種の愛感——凡ての悲劇的運命の中に生死を賭して眞剣に生きてゐる人々、その緊張した一々の顔——に對するなまじしい哀憐が彼の胸の裡に苦しく痛ましく起つて来るのであつた。そしてその『悲劇的な運命』の人々の顔が、抽象的に人類全體の一つの不孝な姿に見えて來た時、彼の眼に熱い涙が浮んで來た。

彼がその涙にうるんだ眼で、既ういつの間にか去つて微かに遠雷のやうに聞こえる嵐の音に耳を傾けながら、降る如く一面に星の現はれた空をぼかんと仰向いて見上げてゐた時、突然何か驚くべきものを見るやうに彼は『アツ』と云つた。彼が驚いたのは當然であつた。彼が何心なくぼかんと視入つてゐた大空の一角には、實に故らに星を其形に並べて鏤めたと思はれぬ巨大な十字形の一星座が判然と見えるのであつた。愕然として思はず彼が半身を起し、そしてその恐ろしい巨大な十字架に相應する丈の基督のすがたをふと心に描いた時、突然稻妻のやうに、ある

天啓が彼の頭に閃いたのであつた。

彼の眼の前に、再び、現實のそれよりはなほ一層高き神秘なる美と權威とに於て、長老と、モニカとの結合體が髣髴と現はれた。その結合體が星座の十字の中に燦然として見えた時、彼はその前にひれ伏したが、次の瞬間彼は『オ、！』と叫んで飛び上つた。

『オ、之だ！ 之だ！』彼は拳を空に打ち振つて喚いた。『オ、今こそ、俺はあの聖像を造らう！ あゝ、もう俺に造れる！ 造れる！ 有り難い！』

一四

其翌日、彼が伯母に起された時にはもう午を過ぎたうららかな日が眞上から長崎の町を照らしてゐる頃だつた。隈なく晴れ上つた紺青な冬の空の下に、雪にぬれた家々の蔭から陽炎のやうに水蒸氣がゆらくと長閑に立ち上つてゐた。

伯母は彼の枕許で役人が來た事を知らせてゐた。

「え？ 役人？」

裕佐はドキリとして思はず身を起した。「掴まへに來たのか？」彼は昨夜捕手に向つて云ひ放つた自分の夢中な言葉を不意に思ひ出した。

しかし彼は其瞬間さつと顔色を變へたが、案外すぐ落ちついた氣持ちに返つた。そして一寸黙つて考へた後で決然と玄關へ立つて行つた。

「何です。」彼は突つ立つた儘訊いた。

しかしフェレラはゐなかつた。

「いや、別に、新しい用事で上つた譯ではありませんが。——昨夜は失禮しました。」

役人は頭を下げた。それはフェレラと共に彼を妓樓に訪ねた「通譯の伴」であつた。

「昨夜お雇ひした事ですが、——實は早くはつきりした御返事を伺ひ度いので。——矢張りどうしてもお願ひ出來ますまいか。」

「いや。」と裕佐は急に安心と、喜びの爲めに勇んで云つた。「やりますよ。お引受けませう。」

そして彼は附け足した。「實はその事を今日貴方々の方へ云ひに上らうと思つてゐたのでした。」

「え？ 承諾して下さる。さうですか。それなら願つたり叶つたりです。」役人は安堵したほゝ笑みを洩らし乍ら云つた。「どうぞ精々よく作つて下さい。お出來ればがよければよい丈けお禮の高も殖えるのですから。はゝ。」

「それでは本當によく出來れば出來るほどつまりお禮は減るわけですね。」裕佐は一寸かう云ひ度くなつた。しかしそれより彼はもうその嬉しい仕事の想像に氣を取られてゐた。そして只、「承知しました。」と云つた。

役人は時々様子を見に來させてくれと云ひおいて歸つて行つた。

「どうです。かう云ふ天狗ならいつでも來て貰ひ度いでせう。」と彼は元氣よく伯母に云つた。「大黒さんが來たやうに嬉しいでせう。」

「ほんに妾はもうこんな嬉しい事はないよ。いよくお前にも運が向いて來たのだね。」伯母は袖で眼を拭き乍ら云つた。

「はい、本當にさうですよ。」
 裕佐はかう云つたが、何だか胸が擦つたいやうな気がした。「さア、此金で、俺はあいつを身うけする事が出来るんだ。もしそれが出来る事なら！」彼はかう考へてゐた。そして晴々してゐた彼の顔は俄かに曇つて來た。

しかし其時伯母が彼の顔をのぞき乍ら云つた。

「だけど、お金はとれても惜しいもんぢやね。そのお前が丹精して造つたものが人の足に踏まれるんぢやと思ふとな。」

「ふむ。心にもない事を、人の氣を察したつもりで。」と裕佐は苦々しく思つた。「もし察したつもりで云ふならば、それを踏む事を強ひられ、踏まねば殺される切支丹の方の事を思ふがい。」

しかしさう思つた時、裕佐は更に或る恐ろしい不安にドシンと胸を打たれたのであつた。「俺が作るその踏繪をあの人、そしてあの弟、——立派な思想と信仰とを抱いたあの美しい有爲な青年も踏む事を強ひられる事になるのだ。彼等はそれを能う踏むであらうか？ 踏んでくれるな

らば有り難い。それは自分の神聖な作品であつても、もしあの人の淨い足がそれを踏むならば俺はいやではない！ 否、むしろそれを本望とするであらう！ だが、あの人、あの熱心な信女はそれを爲し得るであらうか？」

彼はそこにゐられなくなつて、自分の室に入り、まだ疊んでない床の上に寝轉び乍ら考へつゞけた。「もし俺がそれを作つた爲めに、そしてそれがよく出来てゐる事の爲めに、それを踏むあの人の良心がなほ一層苦しみを増し、それをなし能はない事になるとするならば、俺はあの人を、戀人を自ら殺す事になる！」

そして彼は悶へ、一刻前の凡ての輝ける希望と、喜びとは忽ち底知れぬ絶望と懊惱とに變つた。「あゝあ、」彼は凡てがいやになり、眞つ暗になつて力無く呻めいた。

「しかし！」彼は又考へた。「あの人は今迄幾度となくあの踏繪の試練を経て來たのだ。假病をつかつて役人を欺く事は殆んど不可能な事である。矢張り否應なしに苦しい痛恨齋を頼りに踏んで來たものにちがひない。たとへそれは嫩くちやな、何の反古か知れない程の紙であらうと、あの

人はとに角それに堪えたのだ。』それは彼には實に意外な事に思はれたが、又嬉しい意外の事であった。さうだ。何の畫像か讀めぬほどの紙屑であらうと、軒然たる鑄物であらうと、それが聖像であると云ふ意識に於て變りはない筈である。それならばあの人は今迄幾度かそれを爲し得た如く、今度の俺の聖像に於てもそれを爲し得るであらう。』

彼は又彼女の傍に賢い弟の吉三郎がついてゐる事と、昨夜の長老の説教とを思ひ出した。『いや、あの人は軽々しく『神ならぬ物の爲めに神から與へられた身を空しく犠牲にするやうな愚かな不敬な眞似はしない』であらう。——そして、さうだ。俺は又その試練の時の前にはあの人達を訪ねて是非それを——宗教的意味に於ては單なる物質の破片にすぎぬ鑄像を、俺の爲めに踏んでくれるやうに頼んでおく事も出来るのだ。』

そして彼は又希望を取り戻した。

一五

その日の夕方、彼はもう仕事にとりかゝつてゐた。

『踏繪にすると否とはとに角として、俺はあれをとに角作らう。作らずにはおけない。たゞ作る事それ自身の爲めに。』

そして彼はもう安心して、その仕事に没頭してゐた。

彼はもう『あの人の事』も考へなかつた。君香の事も忘れた。そして長い間寂しい間の野中へ行き暮れ、不安にさ迷つてゐた者が、一道の光明——人家の明りをハツと見つけて、只もうひと走りに其處へ行きつく事を考へる他には何も考へない時の如く、机にかゝりきつて、幾枚かの下圖を引いた。

一步も外出せず、不眠の夜をつゞけた餘念ない三日の没頭の後に下圖はまづ望みどほり出来上つた。そして下圖が出来上るや否や彼は粘土の捏ね上げに取りかゝつた。そしてその捏ね上げがすむと彼は青銅の鑄爐にかゝつてゐた。

自分のどこからこんな無限な精力が出て来るのかと彼は自分でおどろいた。

彼の仕事が進むにつれて彼の處にそれを『拜見』に来る者が多くなつた。それは彼の伯母が『お上からの仰せつけで』自分の甥が名譽ある仕事を『お引き上げ申し』てゐる事を近所にふれ廻はしたからであつた。むろん晝間は誰も彼の仕事部屋に這入る事は嚴禁されてゐた。が、中には只の物好きな見物人のやうな顔をして『拜見』に来る信徒の女もゐた。

『まあ、何と云ふ結構な。——有難い。こんな有難いお像を拜んだ事はほんに妾始めてござんすわ。』

其女はうつかりかう口を滑らして自分の信徒である事を明してゐた。然し藝術なぞの分りやうのないかう云ふ普通の人の心でも打つ何かで自分の作に宿つてゐると思ふ事は裕佐には嬉しかつた。

『萩原さん。奢らんけれやいかんぜ。あんた、俄かに大福長者になれるんぢや。』

『あんた方の仕事はえゝなア。當り出したら大したもんぢや。』

こんな事を云ふ男達も少くなかつた。

年は改まつて裕佐は二十七になつた。

元日の朝彼は窓に立つて昇る太陽を拜んだ。『わが仕事に祝福を垂れ玉へ。願はくばそれを我が意の如く成さしめ給へ。生命の主よ。』彼はかう口の中に祈つた。

彼の仕事は着々と云ふ程には抄取らなかつたが比較的早く進んだ。

『ぢや、月末の踏繪式までには結構間に合ひますな。』見に来た役人は云つた。

『それ見い。やつて見れば、お主にはこれ丈の腕はあるんぢや。だからわしがあんなにすゝめたんぢやに。——』と孫四郎は或る晩来て見て云つた。

『よう出来とるよ。ちと西洋式な香いは多いが、まあ西洋の材料ぢやからな。此襲のつけ方などは此大天使ミケルの襲にそっくりぢや。が、決して劣つとりやせん。』

彼はわざと『龍と闘へる大天使ミケル』の浮彫と、裕佐の作とを手にとつて見比べながらかう云つた。が、裕佐はもう此男の『ケチを附ける癖』には腹も立たなかつた。何物も只褒める丈では済まさない此男が之丈の事でも云ふのは餘程感心した事を意味するのが裕佐には分つてゐた。

或る晩裕佐は君香に手紙を書いた。

新年お目出度う。お變りはないか。俺が久しく君の處に御無沙汰してゐるのは君が想像するやうに、君の擲捨ひに憤慨しての事ぢやない。たしかに俺は「坊ちゃん」だが、巨人の坊つちやんだ。だからあんな事杯氣にしてはゐない。俺は今或る仕事の爲めに生れて始めての「急がしさ」に追はれきつてゐる。それは君がいつか俺に「参考品」としてあのコンタスをくれて、之を手本にして妾の像を作つて下さいね。云々」と云つた、まあ、そのやうな仕事だ。全くあのコンタスは今や全で別物のやうな生きた力で、俺の役に立つた事をお禮する。お蔭で俺は今度もしかしたら、始めていゝ仕事をしたと云ふ自分の満足を買へる上に、大分金儲けをするかも知れない。少くとも女一人を身うけする事が出来る位の金は優に得られる豫定だ。だが俺は「不實」だから君を身うけしやうなんぞとは素より思つてゐない！一寸そんな事を考へた事もあるが、まあ君の身はあの『紅毛の犬』に任せる事にしよう。

尤も今夜あたり、俺は一寸君を訪ね度くはある。しかしつゝしむ事にした。俺の仕事は多分明日あたり出来上るのだ。仕事の神は猜疑深く、おまけに君のやうに悪戯氣に富んでゐるから、俺はもう一日と云ふ處で其神にたゞられる事を怖れる。もう一息と云ふ處でその神は、と角そんな悪戯をやり度がるのだ。今夜もし君の處へ行つたら、俺の仕事はきつと呪はれて滅茶々々な失敗に畢るだらう。だから俺は行く事を控へるそれはたしかに「悪所通ひ」だからね！

しかし此「關所」を通り越したら行くよ。いくら君がいやでも！

しかしまあ君の健在を祈らう。俺の體はひよろ／＼だが、元氣は大したものだ。まだ君をいやがらせる位の力は十二分持つてゐるよ。

不實な男より、

君香殿

翌日の朝、彼の仕事は出来上つた降誕祭から廿五日目であつた。
三人の役人がそれをうけ取りに來た。

裕佐は綿で包んだ青銅のピエタを見せた。

「ハア、之ですか！」

三人の役人はそれを見るとハットしたやうに顔の色をかすかに變へた。そしてその聖像と裕佐の顔とを交る／＼見比べた後で、役人同士又互に顔を見合せた。

「見事に出来上りましたな。」

二人の役人は同じやうな事を一齊に云つた。

「之を今日頂いて行けるのですね。」もう一人は云つた。

「まだそれ一つしか出来てゐないのですから。」と裕佐は答へた。「貴方の方に上げるのは同じ物をもう一つ二つ作つてからにして下さい。」

「しかし、とりあへず奉行に御覽に入れ度いのですが。奉行も随分楽しみに待つて居られますんで、とに角之を拜借して行く事は出来すまいか。」

裕佐は斷る譯には行かなかつた。そして『どうか大事にして下さい。』と惜し相に云つた。

三人の役人は鄭重にその聖像を抱えて歸つて行つた。

一六

奉行からは其後何の便りもなかつた。そしてその聖像は四日経つても歸つては來なかつた。裕佐は苛立つて來た。彼は出来上つた許りの自分の作をもつと自分の傍においてゆつくり眺め度かつた、それに即しきつた苦しい製作者の立ち場から、鑑賞者の自由に離れた立場に移つて、心ゆく限り眺めて楽しみ度かつた。人にも見せたかつた。殊に誰よりも早く吉三郎姉弟に見せ度かつた。「あの豚共奴に見せるべき眞珠ではないんだ。勿體ない！」彼はかう奉行の冷淡に腹を立て、取り返しに行かうとさへ思つた。

しかし其晩であつた。

彼は例の如く遅く床に這入つて仕事から一層癖になつた不眠に悩んでゐた。外には冬の風がさら／＼と吹いてゐる様子であつたが、家の中は森として、一間隔てた六疊から伯母のかすか

な軒が聞こえてゐた。

其時彼の室の窓を何かコツ／＼と叩く者があつた、漸くまどろみかけてゐた彼はハツと眼を睜開き、そして黙つて耳を澄ましてゐた。風で折れた木の枯枝が窓の戸に當るのかなと思つた。しかし又コツ／＼と叩く音が聞こえた。たしかにそれは人の指が叩く音である。『もし人とすれば誰だらう。』かう思ふと彼は俄かにいろ／＼の想像の興奮の爲めに顔が赭く輝いた。彼の頭の中に恐ろしい想像さ、嬉しい想像とが一時に混亂した。しかし恐ろしい想像の方が強くなつた。『きつと吉三郎だ之は確な事ではない。』彼は最早かう決め込み乍ら、寢間着の襟をかき合はせて立上つた。そして決心した者の如く、二歩許り歩いてその窓の雨戸をあけた。

『誰です。』彼は云つて闇の中を覗んだ。

『妾よ！』

其處に立つてゐた一人の女性は黒い頭巾を取つた。

『君香か！』彼はギョツとして思はず叫んだ。『ど、どうしたんだ！』彼は眼をこすつた。

『叱！ 静かに！』君香は四邊を素早く見廻はし乍ら云つた。『一寸、出てゐらつしやい！ 大變な事なのよ！』

『何だ！』裕佐はヒラリと窓を飛びこえて外へ出た。そして戸を閉めた。

『貴方、大變よ！』君香は鋭く云つた。『貴方ぐ／＼してゐると明日にも掴まるのよ！ だからさア、早く妾と一緒に逃げなさい！』

『一體、何の事なんだ！ どうした譯なんだ！』

『貴方の作つた聖像が今奉行所で問題になつてゐるのよ。そして貴方は切支丹と云ふ事になつたのよ！』

裕佐には何の事かさつぱり譯が分らなかつた。

『貴方に分らないのは當り前よ。だけど、つまりあの聖像はあんまりよく出来すぎたのよ。無論妾は見た譯ぢやないけれど、お役人達は、たしかに貴方のお作の神聖な力に打たれたのよ。それであんな物を切支丹に見せたらそれを踏む氣はしなくなつて、却つてなほ有り難がつて信心深く

なるだらうつて云ふのよ。そしてあんな神々しいものを作る事が出来る貴方自身も矢つ張り切支丹にちがひないと云ふ事になつたのよ。」

「馬鹿な！」裕佐は呆然として只かう云つた。「そしてお前、一體どうして、どこからそれを聞いたんだ！」

「あの「赤毛の犬」から聞いたのよ。」

「赤毛の犬？ フェレラからか？」

「さうよ！ 貴方は馬鹿ね！ 妾があつた赤毛の犬をあんなに可愛がつて見せたのは一體何の爲めだつたかつて事が貴方には全で分らなかつたのね！」

「え？ それでは……」

「それだから貴方は坊つちやんだつて云つたのよ！」女は罵言するように云つた。「まさかこんな事が起らうとは妾だつて考へてゐた譯ぢやないけれど、あの犬を掴まへて、舐めさせておきやきつと何かの役に立つ事があるとあの時妾ふつと思つたからよ！ そして妾貴方の悪口を云ひ乍

ら、根掘り葉掘り今度の事をすつかりばらさせてやつたのよ！」

「本當か。いつ！」

「今夜たつた先刻の事よ！ あの犬は此頃もう氣が少し變になつて、妾の處に全で入りびたりなのよ。」

「何と云ふ氣遣ひ奴、だが彼奴がいくら決め込んだつて此方がさうでない事を明かにすれや何でもない事ぢやないか！」

「まあ、どうして、そんな事が出来ると思つて！ そんな手段でよ！ そんな誓ひ位でそれが出来る事なら妾だつてこんな心配をして上げはしないわ。貴方、自分の胸と頭を断ち割つてあの犬達に見せる事が出来るか？」

「よし。そんなら逃げる許りだ！」裕佐は一瞬黙つて、考へた後で云つた。「面白い！ お前と一緒にならどんな無人島へでも行くぞ！ だが一寸待つてよ、くれ！」

「何か取つて来るの？ そんな暇はなかつてよ！」と女は云つた。「お金は妾が少しは持つてゐて

よー さアお逃げなさい。すぐー」

『だが、どこへ！』

『天草へ行くのよ！ 妾の故郷へ！ あそこは無数の島があつて昔から奉行の手が届かない唯一つの隠れ場所なのよ。そして妾の家にもらつしやい！ そしてしばらく様子を見てゐるのよ。それは妾が知らせて上げるわ！』

『何だ。お前は行かないのか！』

『妾は行く事は出来ないのよ！ 行き度いんだけど。今夜妾が飛び出たんでもう妾の後は追つ手がついてゐるのよ。今頃はきつともう大騒ぎをして探してゐてよ。そして妾が掴まれば貴方も掴まつて了ふわ！』

『誰が一人で行くものか！ 俺はそんな處で寂しさと憤慨の爲めに死んぢまうだらう。お前が掴まれば俺も掴まつてやる許りだ！』

『よくつてよ。とに角そこ迄一緒に行くわー さア、此妾の丹前におくるまりなさい。』

二人は闇と風との中を浦上の方へ向つて走り出した。

裕佐には運命の實相はどうしても信じられないのだつた。それは本気で信じられるには餘りに馬鹿々々しい話に思はれた。しかし身うけし度いと願つてゐた女と夜逃げをすると云ふ事が彼の若い浪漫的な興味を燃やしてゐた。そしてその興味が、それでもなほ一方に起る恐怖ともつれ合つて彼を戦かせてゐた。しかし峠の茶屋にさしかゝつた時彼女は云つた。

『お待ちなさい！ 事によつたらもう此處に来てゐるかも知れなくつてよ。妾見てやるわ。貴方と一緒に來ちやいけなくてよ！』そして彼女は一人で進んで行き、中を一寸のぞくと彼を手招きした。

『一體何と云ふ事になつたのであらう！ もし之が本當に冗談でないとする！ そして誰が、何の権利があつて、人をこんな目に遭はせるのだ！』と思ふと、裕佐はむらくと殺伐な怒りに燃えたのであつた。そして彼女の後について、その茶屋へ還入つて行かうとした時彼女の叫び聲が聞えた。

彼女は早くも彼等を見つけて隠れてゐた二人の男に手を押えられて悶えてゐた。

「お離しつてば！ 搦まつてやるから！」そして彼女は男の手に噛みついた。

「ふむ。お前丈けの事ならいくらでも離してやるさ！」男は軽く女の頭を突きつけ乍ら云つた。

「だが他に誰かゐるだらう。お前がわざ／＼此夜半にかけて行つて駈け落ちを誘つた色男がよ！」

「此處にゐる！」

裕佐はそこへ出て突つ立ち乍ら云つた。「それがどうしたんだ！」

二人の男は嬉し相ににやりと笑つた。そして女の手を離した。

「へ、案の定おいでなすつたな。色男。用事は馬にあるんぢやない。此牝馬に乗つてゐる貴様にあるんさ。」

さう云つた男は降誕祭の晩に裕佐がその手頸を握つた奥力であつた。

「貴様は切支丹だとあの時云つたつたな。」

「皆を助けてやり度い爲めにだ！ だが俺が切支丹だつた處でそれが何だ！ 貴様に何の關係があるんだ！」

「當り前よ。あつてたまるもんかな！ だが國家にはあるんだ相だ。」

「お前さん達此人を切支丹だと思つてゐるのかい！ 鏡覗みの當てすつぽにも程があるよ！」と君香はつんざくやうに笑つた。「もし此人が本當にさうだつたら何で自分の仲間を殺すやうな踏繪なんぞを作るだらう！ それで分らないつてまあなんて馬鹿な役人だらうね！」

「役人が馬鹿だらうと恠巧だらうと俺達の知つたこつちやねえや。とに角一緒に來りやいゝんだ。さア。」

裕佐は無念相に黙つて考へてゐたがキョト／＼した娘の持つて來た熱い茶を飲んだ。

「よし、行く丈けは行つてやつてもいゝ。そして俺を切支丹だと疑ふなら俺はあの踏繪を自分で踏むでやらう。さうすれやいゝ譯だナ！」彼は茶を飲む事によつて考へた事を云つた。

「處があの踏繪を作つた者の罪は、それを踏まない者の罪よりは重いんだ相だ。」復讐心に燃えた

眼を楯に向け乍ら與力は云つた。

『まあ、何ですつて？』裕佐よりも早く君香は叫んだ。『それなら一體踏繪と云ふものゝ意味はどこにあるんだらう！ そんな事ならわざ／＼面倒な踏繪なんぞを踏ませなくつたつて疑つた者をどん／＼片つ端から殺して行きやいゝ譯ぢやないか。その方がよつぽどお前さん達らしいわ！』

『まつたくさな！ たしかに理屈はあらア。』と與力は云つた。『奉行の前でさう云つて見るよ！ 其通り！ さうしたら多分御放免にあづかるだらうて！』

『さア。貴様はおとなしく機へ歸れ。な。親方は心配してら。大事な玉が逃げちやつたつて。』ともう一人の男が君香の手を取つて云つた。『多分明日の晩あたりは又お芽出度く此色男に逢へるだらうよ。そしてお祝ひの酒盛りでもやるがいゝやな。』

『もうどうせ逃げたつて駄目だよ。お前の爲めに網の目のやうな非常線を張らせられてあるんだからな。』與力は又裕佐に向つて云つた。『おとなしく従つて來るのが一番惻巧だよ。』

そして四人は茶屋を出た。

一七

裕佐は奉行の前の訊問に於て、態度が『尊大』であつたのが非常な損であつた。そして彼に『手頸を掴まれて動けなかつた』與力の復讐心がその損をなほ大きくした。

『とに角踏繪を踏まない者は處刑をうけるのが掟だ。なぜうけるかと云ふと國法に背く切支丹、つまり國賊と云ふ事になるからだ。それは分つてゐるな。そして貴様はあの時自分でわざ／＼その國賊である事を與力に宣言してくれた相だからな。』と代官は云つた。

『併し君達が僕を疑り出したのは君達に頼まれたので僕が作つたあの踏繪からではないか。』と裕佐は云つた。『だから僕はそれを踏むでやらう。何なら、それをこゝでぶちこわして見せてやらう。君達の眼の前で。』

彼は君香が與力に云つた言葉をも繰返へした。

『いや、わしはあの像が傑作である事は認めるんぢや。』奉行は云つた。『あの傑作はわしの方で大

事に所蔵するだらう。信者の心を本當に試めすにはあれ位の傑作でなくちや役に立たぬでな。その點君の功勞は永く記念しておくだらう。しかし」奉行は流石にやゝ云ひ過ぎり乍ら云つた。「甚だ奇怪な行きがかりになつた譯であるが、あの作に現はれてゐる君の信仰、——それはたしかに普通一般の信者のそれよりは力強く、深く、怖るべきものであるが、此處にゐる凡ての同僚が等しくそれを認めるが故に、遺憾ながら我等は君を死刑に處せねばならぬ。それはつまり君が信者として又一種の傳道者として、ばてれん同様に重んぜらるべき者であると認めるからぢや。」

奉行は息を吐いて背り返り、靜かに四邊を見廻はした。

『しかしそれでは——』と彼は又語調を柔らげて云つた。「否、それ丈けでも充分處刑の理由にはなつてゐるのぢやが、更に萬全を期して云ふならば、それ丈けの理由を以て君を處刑する事はまだ幾分一人決めの推量に依る處分であるとの非難をうけても仕方がないと云へる。吾等は法官としてどこ迄も一人決めの推量を排し、現實の證據を尊重する。ぢやからして、その證據を見やうではないか。今度の踏繪の調査に於てぢや。君の傑作がもし吾々の不吉な想像を裏切らなかつた

ら、君は自分の仕事の成功の證明に免じて瞑すべきぢや。が、反對にもし吾々の想像を裏切つたとしたらぢや。君は生命の無事を大いに祝すべきぢや。』

かくて、審問は終つた。

が、其晩長崎の町には踏繪の鑄造者萩原裕佐が『特別なお慈けを以て』秘かに斬罪に處せられたと云ふ噂が擴まつた。

一八

正月の二十八日から三十一日迄、四日間交互つて踏繪の儀式は奉行所に於て莊重に行はれた。そしてその儀式には祐佐の作『青銅のピエタ』がつかはれた。

三日間のうちに十五名の踏み得ざりし者が現はれた。かゝる事は前例のない事であつた。

最後の日更に四人の者がそれを踏まない事の爲めに捕へられ『檢べ』の爲めに殘された後、モニカは白無垢の裝束を着け、したゝる如き黒髪をひと處元結で結び、下げ髪にして靜々と現はれ

た。

水を打つた如き式場の中央に藁藁を敷き、その上に低い臺を置き、更にその上に、踏繪は置かれてあつた。そして其左右には輿力が向ひ合ひに床几に腰を卸し、一々の者の「踏み方」を疲れたい眼できつと睨み見てゐた。二千人以上の其日の「踏み方」は畢つて、もう日暮に近かつた。

モニカは神色自若としてその前に進み、跪き、先づその像を手にとつてじつと打眺めた。

「あゝ貴方は、矢張り、信心を持つてゐらしたのですね。有り難う。」役人にも聞こえぬ程の低い聲で彼女はかう呟いた。そして急にそれを抱きかゝえる如く奔と胸に押し當て、接吻し、又それを、恭しく臺の上に置くと手を合はせて拜んだ。勿論彼女は其場に引き立てられた。

彼女の後にすぐ君香はつゞいた。君香は同じ事をし、そして自分を掴まへた役人に云つた。

「妾は信者ではないのよ。それは本當。だけど妾には此お像を踏む事は出来ないわ！ 人間としてそんな事は出来ないわ。さあ繩をおかけなさい。地獄の犬殺しさん達。」

そして彼女は曳き立てられ乍ら云つた。「あゝ嬉しい！ 妾は今日の日をどんなに長く待つてゐ

たゞらう！」

翌日の夕方立山の刑場には廿一の新しい十字架が樹てられてゐた。しかしそこに曳き立てられた者は廿一人ではなかつた。廿一人がその十字架にくゝりつけられた後、更に二人の男囚が意外な處から曳き立てられて來た。それは長老アントニルビノと萩原裕佐であつた。

此二人の面被が剝がされた時、二人の女が十字架の上に叫び聲を擧げ、そしてその一人は其場に氣絶をした儘息を引き取つた。それは君香であつた。彼女はその一週間前から全く絶食してゐたのであつた。

長老は一同に最後の言葉をかける事が出来ないやうにその口を布で塞がれてゐた。

「あゝ長老様！ もう何も被仰る事はございません。妾達は勝ちました。天国は妾達の物でございます！」

「おゝ何と云ふ光榮な喜び！」モニカは煙の中でかう云つた。

裕佐は刀を持つて自分の方に進んで來る男を見ると唐突にその胸を蹴飛ばした。そして驀らに

竹矢來の方に向つて走り乍ら「助けてくれ！ 誰か！ 誰か！ 吉三郎！」と叫んだ。血走つた彼の眼は狂ふごとく此友を探してゐた。恰もその友の救ひに最後の望をかけたゐたやうに。しかし彼の縛された手には縄がついてゐた。その縄で彼は後ろに引き倒された。彼は起き上り、そして自分を捕へに來た者を再び蹴らうと足を上げた時、「助けてやらう。お慈悲だ！」と云ふ聲が後ろにして、刀が脊中から彼の胸を突き抜いた。彼は足を宙に上げたまゝ斃れた。

かくして奇怪なる運命の操りによつて生涯としては廿七を最期に、仕事としては「唯一つの聖像」を此世への供物として彼はあへなく死んだ。

其時その刑場で一人の版畫師が「二人の女と南蠻鑄物師の死」と云ふ諷刺畫を描いてゐた。

「あゝお蔭でわしにも傑作が出来たわ。」その男は、矢立を帯に突つ込むとかう云つてそのなまなましい残忍な畫を役人達の前に一同に見せ乍らトゲ／＼しく大きな口をあいて笑つた。云ふ迄もなくそれは孫四郎であつた。

しかし「貴方は矢張り信心を持つてゐらしたのですわね。」とモニカが云つた事は誤りであつた。

萩原裕佐は最後迄決して切支丹ではなかつたのである！ 彼は只一介の南蠻鑄物師にすぎなかつたのである！

——一九二二年一月二十九日——

附記 寛文の頃長崎古川町に萩原といふ南蠻鑄物師がゐた事、そしてその踏繪の神々しく出来すぎた爲

め信者と誤られて殺された事は事實である。又拷問の仕方や、始めの歴史叙説は無論、野澤忠庵と云ふ轉び伴天連が踏繪を發明した事も事實であり、アントニオ・ルビノと云ふばてれんが、殺された事も事實である。但しそれらが同時代であつたかどうかは自分は知らぬ。此作の生れるヒントを與へてくれた長崎永見氏に此處で記念としてお禮を述べておく。なほ参考として小野氏著「切支丹の殉教者」及び「日本に於ける公教會の復活」「幕府時代の長崎」「長崎年表」を見た事を記しておく。又此作には故らに多少の時代錯誤を致して許しておいた。例へば寛文時代に浮世繪の版畫

が長崎にあつた事杯は歴史的には錯誤であるが、元來純然たる歴史小説ではなく、史料にヒントを得た余の創作であるから、史的事實は歴史に據つて買ふ迄の事である。

歴史物傑作選集第三卷『エピクロスの快樂』終

大正十三年十一月十二日印刷
大正十三年十一月廿五日發行

歴史物傑作選集
『樂快のソロクピエ』
定價一圓八十錢



著者	長 與 善 郎
發行者	東京市赤坂區青山南町三ノ五五 面 家 莊 信
印刷者	東京市神田區三崎町三ノ一 倉 谷 鎮 夫
印刷所	東京市神田區三崎町三ノ一 共 榮 舍 印 刷 所

發行所

東京青山南
町三ノ五五
株式会社 而

立 社

電話青山五七六
振替東京六二二五六

而立社主要出版物

社會科學大系 全十二卷・十七冊

- (1) モルガン「古代社會」(上下)
- (2) ヘネー「經濟思想史」(上下)
- (3) フアリオラ「唯物史觀研究」
- (4) パラノウスキ「近世社會主義」
- (5) スヘンサー「第一原理」(上下)
- (6) エルウツド「心理學的社會學」
- (7) タルド「模倣の法則」
- (8) フエルリ「犯罪社會學」(上下)
- (9) ミル「コント實證哲學」
- (10) クノー「マルクス歴史社會國家學說」(上下)
- (11) ヴエグレン「有階級論」
- (12) ロリア「綜合經濟論」

經濟學說體系 全十卷・十二冊

- 高安 論 (1) 價值及價格論(上下)
- 高安 論 (2) 貨幣論
- 高安 論 (3) 資本利及企業利得論
- 高安 論 (4) 地代論
- 高安 論 (5) 人口論
- 高安 論 (6) 租稅論
- 高安 論 (7) 貨幣論(上下)
- 高安 論 (8) 自貿易及保護關稅論
- 高安 論 (9) 經濟恐慌論
- 高安 論 (10) 社會政策論

バクル世界文明史 全六冊 (完成)

理學博士 石川千代松先生・理學博士 三宅驥一先生譯

ダーヴン全集 全十二卷・十五冊 (近刊)

各書詳細內容見本進呈

527
52

終

